

# 「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」における授業通信の効果

—講義型授業でのアクティブ・ラーニングの試み—

上 村 有 平

## 1. はじめに

### (1) 講義型授業における課題

大学の講義型授業は、演習型授業に比べて教員が学生に知識を伝達することが中心となる。そのため発表や議論といった学生の活動が少なく、教員の話を書くことがメインになる。また、講義型授業は受講生の人数が多いことも重なって、教員から学生への一方的な知識伝達が優先され、学生が受動的になりやすいという問題点が以前から指摘されてきた。

さらに近年、アクティブ・ラーニングの重要性が認識される中、講義型授業でも教員と学生の相互作用、あるいは学生同士の相互作用を活性化し、学生が能動的に学習できる授業づくりが求められるようになってきた(レビューとして、溝上(2014))。一方で、小野田・篠ヶ谷(2014)が指摘するように、講義型授業の要である知識伝達も依然として必要不可欠なことである。

このように今日の大学の講義型授業は、一定の知識を確実に伝達するという講義型の形態を維持しながらも、教員と学生、あるいは学生同士の相互作用を行うという両立困難な課題に直面している。

### (2) 「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」の概要

筆者は保育者養成の短期大学(2年制)において、講義型授業の「教育心理」と「保育の心理学Ⅰ」<sup>1)</sup>を担当している。幼稚園教諭免許、保育士資格の取得を目指す1年生全員が受講するため、1学年約100人を2クラスにわけた50人規模の授業として開講されている。開講時期は、「教育心理」が1年次前期、「保育の心理学Ⅰ」が1年次後期である。つまり1年生にとっては、毎週の心理学の授業を1年間にわたって受講し、教育心理学と発達心理学<sup>2)</sup>の基礎的事項を習得するという流れになっている。

### (3) 授業通信の概要

この「教育心理」と「保育の心理学Ⅰ」で筆者が取り組んでいるのが、『授業通信』である(付録1~2)。授業通信は、毎回の学生のレポート<sup>3)</sup>を抜粋してA3用紙にまとめ、次回授業で配布するものである。2014年度から導入し、本稿執筆の2016年度現在で3年目になる。

授業通信の作成過程や内容は次の通りである。

- ① 毎回の授業終了前15分で学生はレポートを作成する。レポートはB6の白紙にその日の授業から学んだこと、気づいたこと、質問などを記述する。
- ② レポートの記述をピックアップし、キーワードやテーマごとにA3用紙1枚分にまとめる。授業通信1回あたりのコメント数は、およそ25~30である。前年度までの学生のレポートも織り交ぜ、「卒業生」「先輩」として紹介することも多い。
- ③ 次回授業で復習と発展を兼ねて紹介しながら授業を展開する。
- ④ 教員のコメントは、授業時に口頭でくわえる。
- ⑤ 教員が学生からの質問に答える「Q&A」、学生が推薦する音楽や映画、ドラマなどを紹介する「おススメの音楽・映画・ドラマ」<sup>4)</sup>を適宜設けることもある。
- ⑥ 倫理的配慮として、レポート内容を匿名であつても授業通信で紹介されたくない場合は、レポートの紙に「×」印をつけるように学生には伝えている。

講義型授業で学生から提出されたレポートや感想に対してフィードバックする取り組みは、これまでも様々になされており、代表的なものとして「大福帳」(向後, 2006; 織田, 1991)、「何でも帳」(田中, 1997)、「授業通信」(藤田・溝上, 2001; 溝上・藤田, 2001)などが挙げられる。

たとえば田中(1997)の「何でも帳」は、「大福帳」のように学生のコメントに教員がコメントをつけ

て返却するだけでなく、学生のコメントからピックアップして1枚の紙にまとめたものを次回の授業時に配布し、それをもとにその日の授業を進めていくものである(大山, 1998)。

あるいは、本研究と同じ「授業通信」と題して実践している藤田・溝上(2001)では、「休講・試験日程などの連絡事項」「前回の授業の補足」「担当教員から学生への意見・アドバイスなど」「授業に関係のある質問・感想・意見に答えるコーナー」「授業に関係のない質問に答えるコーナー」などから構成される。この授業通信の特徴は、学生の書いたレポートに教員がコメントを加えたり、学生からの質問に答えるなど、紙上で教員と学生の相互作用が行われている点にある。

本研究の「授業通信」はこれらの実践と共通点も見られるが、特徴としては次の3点が挙げられる。

- ① 学生同士の相互作用：授業通信の内容は学生のレポートを抜粋したものが中心で、教員のコメントはほとんど掲載していない。つまり、様々な学生の意見や体験談を最大限に掲載することで、学生の発言や質問、議論に代わる役目を担っている。
- ② 授業教材：授業通信を配布するだけでなく、授業の重要な一部にして授業を展開している。この点は、「何でも帳」と共通している。
- ③ 教員と学生の相互作用：授業教材として活用するため、教員のコメントを必要に応じて口頭でつけている。ただし授業の流れがあるため、コメントを個別につけることもあれば、いくつかまとめてつけることもある。

#### (4) 授業通信導入の背景

では、そもそもなぜ授業通信を導入することになったのか、その背景について確認しておきたい。大学の講義において、学生が自発的に質問したり意見を述べることで自分が困難であることは、従来から様々なところで論じられている(e.g., 藤井・山口, 2003)。くわえて筆者は「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」において、「子ども理解」だけでなく学生自身の「自己理解」を重視している。これには2つ理由がある。1つには、自分を深く理解しているからこそ、子どもを含めた他者を深く理解することにつながるからである。もう1つには、大学生は自らのアイデンティティの形成、すなわ

ち自分づくりがテーマとなる青年期を生きているため(Erikson, 1959, 1968)、自分と向き合い自己理解を深めることが重要になるからである。特に保育者(幼稚園教諭・保育士)を目指す学生にとって、大学時代にある程度アイデンティティが形成されてこそ、子どもや保護者と向き合う土台となるのである。

このように自己理解を重視した授業を行うため、学生の悩みや葛藤に関連した問題を扱うことが多く、学生の個人的で内面的な問題に関連すればするほど、授業中の発言やグループワークなどは困難になる。そうになると、教員と学生の相互作用、および学生同士の相互作用は局限され、教員から学生への一方向的な授業を余儀なくされる。すなわち従来の授業において、①講義形態を維持しながら、②学生をアクティブ(能動的)にするという課題があったのである。

授業通信を導入する以前も、毎回の授業レポートの一部を次回授業で紹介したり質問に答えることで、授業中の学生の発言や議論の代わりとしていた。授業の意見や感想をレポートやコメントカードなどで記述させる方法は、様々な授業で実践されてきたところである(溝上, 2014; 宇田, 2005)。その中で筆者の実践の特徴は、学生から出てきた意見や経験をできる限り授業に取り入れ、他の学生に紹介しようとした点にある。

しかしながら、学生の意見や経験のほとんどはパワーポイントのスライドに提示するにとどまり、学生の手元に残らず、その場限りのものになっていた(学生への配布資料は、パワーポイントそのままではなく、重要ポイントのみをプリントにしているため)。筆者自身の素朴な思いとしても、「多くの学生がこれだけしっかり書いているのだから、教員だけが知っているのはもったいない」「より多くの意見や経験を他の学生とも共有したい」「後で見返せるようにもしたい」といったものがあつた。また学生からも、「レポートをまとめたものがほしい」というリクエストが出てくることもあつた。

こうした背景から、講義型授業の「教育心理」「保育心理学Ⅰ」で2014年度より始めたのが授業通信である。2016年度現在で3年が経過し、学生の学習がそれまでよりも能動的となり、一定の効果を上げている感がある。そこで、授業通信の効果の詳細に検討することは、講義型授業におけるアク

ティブ・ラーニングの実践例を提示する上でも意義があると考えられる。

## 2. 本研究の目的

本研究では、「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」における授業通信の効果について、学生のレポートに見られた授業通信に関する記述を中心に検討することを目的とする。

なお、本研究ではアクティブ・ラーニングを「能動的な学習」と広く定義して議論を進める。

## 3. 方法

**調査対象** 2014～2016年度の「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」の受講生約300人。男子学生は4名で、残りはすべて女子学生である。

**調査内容** 授業レポートにおける授業通信に関する記述を分析する。

**倫理的配慮** 毎回の授業でレポートを記述する際に、匿名でも授業通信に掲載されたくない場合は「×」を用紙に記入するように伝えている。また本研究に先だち、研究発表や論文に匿名でも掲載されたくない場合は連絡するように伝えた。

## 4. 結果と考察

授業通信の効果について、学生のレポートにおける授業通信に関する記述を抜粋し、「大福帳」(織田, 1991)、「何でも帳」(田中, 1997)、「授業通信」(藤田・溝上, 2001; 溝上・藤田, 2001)などの先行研究も参考にしながら分類した。その結果、「レポートの質の向上」「教員-学生間の信頼感形成」「授業内容の定着・深化」「復習の充実化」「授業外の能動的学習」「他者との相互作用・対話の促進」「他者理解・自己理解」「自己受容にともなう自己変容・他者受容」といった8つの効果が見られた。以下、それぞれについて論じていく。

### (1) レポートの質の向上

授業通信は学生のレポートから構成されるため、その成否は学生のレポートの質にかかっている。つまり、学生がどれだけ真剣かつ本音でレポートを書くかで、授業通信の質、ひいては学生にとっての授業通信の価値が変わってくる。そもそも、レポートを書くことへの動機づけは、授業通信導入前の授業において大きな課題であった。能動的にレポートに取り組む学生もいる一方で、「どう

書いて良いか分からない」「書くことがない」「面倒」などの理由から受動的・義務的になる学生もいた。しかし、授業通信の導入によってレポートの質に向上が見られるようになったのである。そこで、この要因について検討したい。

#### a) レポートの手本 (モデリングの効果)

レポートの質が向上した要因の1つとして、授業通信に掲載された学生のレポートが手本となり、学生それぞれがレポートの書き方の具体的なイメージを抱けるようになったことが挙げられる。たとえば次の①②のように、他の学生の文章に触発されたことがうかがえる記述が見られた(下線は筆者による)。

- ① 私は文章を書くのが上手じゃなくて皆のように書くことができませんが、授業通信を見て私もこんなふうに上手に書けるようになりたいといつも思っています。
- ② みんなの考えはすごいなといつも思っていました。私とはまったく別の考えだけどそれがすごく納得のいく内容だったり、私と同年なのにこんな深い考えができるんだと驚いていました。

さらに、③のように自分の内面をさらけ出して面白いと知ることのきっかけにもなっているようである。

- ③ 今まで生きてきた中で出会ってきた・関わってきた人のこと、友達のことなどマイナスのことを多く思っていたので、あまり話にできませんでした。最初は何を書いて良いか分からなかった授業レポートも、他の人が悩みや自分の思いなど自由に書いているのを見て、私も思っていることをはっきり書いて良いんだと思い、正直な気持ちを先生に書いて伝えることができました。

授業で毎回作成するレポートでは、4月初から自分の思いを素直に深く書ける学生もいれば、一定レベルに到達するのに時間がかかる学生もいる。そのため授業通信を導入するまでは、レポート内容が受講生全体として深まるまでにある程度の授業回数を要した。しかし、授業通信をきっかけにレポートの質が全体的に向上し、4月に授業が始まって間もない段階からレポートに深まりが出てきたのである。

#### b) レポートの価値づけ

学生側に授業通信が授業に不可欠であるという

価値づけが行われると、レポートに対する価値づけも生まれてきた。たとえば、レポートを書くことで④「授業の振り返りができる」「自分が授業で学んだことを他人に伝えることができる」、⑤「自分を見つめ直したり、自分の思いを改めて考えることができる」といったようなものがある。

④ レポートを書くことで授業の振り返りができるし、自分が授業で学んだことを他人に伝えることができているです。

⑤ レポートを書くことで自分を見つめ直したり、自分の思いを改めて考えることができている、それはいいことだなと思います。

また、レポートに自分の本音や内面を「書く」ことによって、「気持ちが楽になる」といた心理的な効果がある (cf. Pennebaker, 1997)。この点について記述している学生は⑥⑦をはじめ、非常に多い。

⑥ 誰にも言えなかったことや言いにくかったことが、レポート用紙だと書いていて、少し気持ちも楽になっていました。

⑦ 毎回書く授業終わりのレポートでは、授業内容に合わせて昔後悔したことや、あまり友達には言えない悩みなどが書けたりしてスッキリしたストレス発散できたこともありました。書くだけで気持ちが楽になるので、レポートがとても好きです。

レポートの価値づけは、単に学生の個人レベルにとどまらず、⑧「私たち全員の思いを伝えられるレポート」といったように、受講学生全体の問題としてとらえる学生もいた。

⑧ 私は心理の授業のやり方が好きです。毎回の授業の終わりに私たち全員の思いを伝えられるレポートを書いて、次の授業でいろんな人の意見や思いを見ることができるようになっていてとてもわかりやすし、自分の思いをきちんと受け取ってもらえていると感じる事ができたからです。

## (2) 学生－教員間の信頼感形成

先の⑧の後半部分、「自分の思いをきちんと受け取ってもらえていると感じる事ができた」にくわえ、次の⑨のように授業通信に掲載されることで教員との相互作用を実感する学生もいる。

⑨ 先生が自分の書いたものを載せてくださったりすると、ちゃんと見てくださっている

んだなと温かい気持ちになります。

このように授業通信が、学生と教員間の信頼感形成に寄与していることがうかがえる。

## (3) 授業内容の定着・深化

ここまでは、授業通信の大前提となるレポートに関わった効果、学生－教員間の信頼関係について見てきた。ここからは、授業内容そのものの効果について検討していきたい。

前述したレポートを書くことで④「授業の振り返りができる」、⑤「自分を見つめ直したり、自分の思いを改めて考えることができる」といった記述は、「授業内容の定着・深化」の問題としてもとらえられる。

また、⑩のように、授業通信に掲載されることを意識することで、「授業の集中につながる」という効果も見られる。

⑩ 少しでも授業通信に記載されるように、授業内容を理解してレポートを書こうと思うので、授業の集中につながると思います。

また、授業通信に掲載された学生の体験談や考えは、学生にとって身近で理解しやすい。それゆえ抽象度の高い授業内容であっても、⑩のように身近で詳しい具体例として理解の助けになる。

⑪ 授業内容の詳しい例もあり、想像しやすかったり理解しやすかったです。

「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」の中で特に抽象度の高い内容として、たとえばピアジェの発達理論が挙げられる。4つの発達段階「感覚運動期」「前操作期」「具体的操作期」「形式的操作期」にくわえ、「表象（象徴）機能」「物の永続性」「自己中心性」「保存概念」など難解な用語が多く、保育や教育にかかわる心理学を学ぶ上での通過儀礼のようなところがある。その内容を、心理学を専攻しないどころか、人生で初めて心理学を学ぶ1年生に授業するとなると難しい面が多い。それが授業通信によって、学生の具体的経験をもとに理論を学ぶことが可能になるのである（なお、付録2の授業通信はピアジェの発達理論に関するレポートを中心に作成した回である）。

ここで特筆すべきは、⑫「みんなの小さい頃のエピソード」と表現されている点にある。

⑫ みんなの小さい頃のエピソードなどができて、なんかうれしいし、見ていて楽しいです。



つまり、まさに同じ授業を受けている学生、あるいはかつて受けた先輩のエピソードだからこそ、より身近に感じられるのである。これが教科書に掲載された具体例にない授業通信の利点であると指摘できよう。

さらに、⑬の学生のように自分だけでは考えられなかったことを、授業通信をきっかけに考えられるようになることもある。

- ⑬ 自分には考えられなかったことや気付かなかったことが、他の人のレポートを通じて考えられるようになります。

こうしたことから、授業通信によって授業内容を「難しい」と必要以上に感じさせずに、重要事項の理解が深まり、学生の能動的な学習にもつながっていると考えられる。

さらに、これは授業通信に掲載された学生に限定される効果であるが、自分のレポートが授業通信に掲載されることで、⑭のように自分の意見・考えが間違っていないと感じたり、⑮のように授業内容の理解がさらに深まるといったこともある。

- ⑭ 自分のレポートのコメントが載っているのを見ると、自分の意見や考えは間違っていなかったんだと思うと安心します。
- ⑮ 私自身の書いたことが次の授業で紹介されたら、そこから授業とどう関わっているのかを説明してもらえらることもあるので、とても身に入ってきてやすいです。

つまり、学生にとって自分のレポートが授業通信に掲載されることにも、授業内容の定着・深化につながる面があると言える。

#### (4) 復習の充実化

授業通信を導入するまでは、前時の復習での説明を前時とあまり変えることができず、復習がどうしても単調になりがちであった。これに対し、授業通信を前時の復習時に参照することで、⑯のように前時の単なるくり返しではなく、学生のレポートから説明し直したり、さらなる発展的な要素を含めることができるようになった。

- ⑯ 授業通信のどこが良いかという、毎回授業をふり返れるところです。1週間たつと、前回の授業内容を忘れていたこともあるので、さらに具体的な内容が加わった授業通信での振り返りがとても身に付きやすい一因となっていると思います。

また、前時に分からなかったことも、⑰のように他の学生の記述を見ることで理解できることがある。

- ⑰ 分からなかった内容が他の人の感じたことを見ることで理解できたこともあったので助かっています。

さらに、前時の内容は次の授業の契機を含んでいることが多いため、⑱のように授業通信が「今日の授業に結びつける」役割も果たしている。

- ⑱ 読んでいるうちに1週間前の内容を思い出して、今日の授業に結びつけることもできるので良いです。

このように、従来は単調になりやすかった復習の時間が、授業通信によって学生の様々な意見や体験をもとに復習できるだけでなく、発展的な学習にも通じる充実した時間になっている。特に、前年度までの受講生のレポートは、その日の授業内容の具体例としても提示でき、貴重な教材となっている。

#### (5) 授業外の能動的な学習

##### a) 自習の促進

授業通信が学生にとって意味あるものと認識されると、⑲⑳のように授業開始前の休み時間に、配布直後の授業通信に目を通す学生も見られるようになる。

- ⑲ いつも、授業の始まる前など、つい読んでしまいます。
- ⑳ 授業通信は、いつも配られたらすぐ目を通して自分のものが載ってるかなと期待何か分からないけど、探します。

また、授業通信を導入した当初の目的の1つに、「学生の手元に残るようにする」というものがあった。学生のレポートの記述を見ると、㉑㉒のように、授業直前のみならず、授業外で授業通信を見直すことも出てくる。

- ㉑ 私も他の人が言っているように、いつも授業通信が楽しみで、授業のはじまる前から読んで、前回のものをもう1度見直したりしていました。(中略) これからの自分のために、この授業のファイルはずっと取っておきたいと思います。
- ㉒ 家に帰って何もする気が起きない時は、授業通信を見ている時もあります。私と同じ気持ちの人がたくさんいて心がなごみま

す。また、私が思っていなかったようなことも書いてあって、「同じ年齢なのにこんなに書いてすごいな」と勉強になります。

ここで特筆すべきは、授業通信が試験範囲から除外されている点にある。つまり、学生は試験勉強のためではなく、授業通信の内容そのものに魅かれて能動的に読んでいたのである。

#### b) 授業外での他者との交流

また、⑳～㉑のように、授業通信をきっかけに授業外で友人や家族と話をするなど、他者との交流、相互作用にもつながっているようである。

㉑ 授業の後に「やっぱり皆こうだよ」と話し合ったりもしました。

㉒ とても自分のためになると思ったところは母にも話したりと、親子で楽しんでいろいろ考えながら読んでいます。

㉓ 心理の授業で教わったこと、聞いたことは、授業が終わった後も友達と改めて話したり家族に話したくなるが多かったです。きっと、私たちの身近に感じられる事柄であると同時に、誰かと意見を共有し合うことで考えがより深まるものだからだと今なら言えます。

こうした授業外での他者との交流・相互作用も、自習の促進と同様に学生の能動的な学習としてとらえられよう。

#### (6) 他者との相互作用・対話の促進

(1) でみたレポートの質が向上することは、授業通信を通じた学生同士の相互作用の質も向上させることにつながる。これは、学生同士の相互作用を重視するアクティブ・ラーニングの観点からも重要である。

##### a) 本音を引き出す<sup>5)</sup>

学生同士の相互作用の質を向上させる大きな要因となっているのは、㉔㉕に見られるように、授業通信をきっかけに、友人同士でもなかなかできない話、しかしきっかけがあればしたいと考えている話が可能になる点であろう。

㉔ 授業通信を読むのがとても楽しいです。友達ともなかなかこんな話をする機会がないので。

㉕ 毎時間学生(友達)の本音を聞くことができましたが、普通に生活していてもなかなか

かできないことなので、あの制度はすごくありがたかったです。

ここで重要となるのは、次の㉖に見られるように、他の学生も「本音」を書いている、それも通常なら話したくないような内容まで書いていると学生が認識している点にある。

㉖ みんなが自分に正直になって、きっと書きたくないことや知られたくないこともたくさんあると思うのに書いて、それを知ることができて嬉しいなと感じました。みんながそうやって書いてくれるから、自分も本当の思いが書けているんだろうなと感じました。

そして、㉖の後半部分に見られるように、他の学生が本音を書いているという認識があるからこそ、自分も本当の思いが書けるというのである。つまり、授業通信には学生の本音を引き出す効果があると指摘できよう。

土井(2014)が指摘するように、今日の若者にとって安心して本音をさらけ出せる相手を見つけることは、非常に困難になっている。一方で、先の㉖～㉗に見られるように、学生は他の学生の本音を聞けることを貴重な機会として受け止めており、学生自身も機会があれば本音で話したいと考えていることがうかがえる。それゆえ、学生同士が安心して本音で対話できるという点からも、授業通信は有効なツールであると言えよう。

以上の積み重ねが、㉘「心のキャッチボール(コミュニケーション)」、㉙「心の会話」に見られるように、授業では実際に学生が話し合ったり意見を発表する機会があまりないにもかかわらず、学生同士、教員と学生の相互作用を実感することにつながるであろう。

㉘ この授業は先生とクラスの間と心のキャッチボール(コミュニケーション)をとっており、授業が終わるとスッと心が軽くなっていると思います。知らず知らずの間に、みんなに自分の悩みを相談し、受け止めてくれる感覚です。

㉙ 授業なのになぜか先生や周りのみんなと心の会話をしているように思えました。決して誰かは分からないけど、私と同じ悩みを抱えている子がいたり、私以上に悩んでいる子がいたり。。そのレポートに対して先生が言う一言も、私にとっては気持ちが軽

くなったりポジティブになれるきっかけでした。

ここで学生は「心のキャッチボール（コミュニケーション）」「心の会話」と表現しているが、授業通信にはまさに「対話」を促進する効果があると言えよう。

#### b) 学生同士のつながり・一体感の形成

こうした学生同士、教員と学生との相互作用・対話の結果、⑳「みんなと繋がれる」、㉑「みんなを近くに感じた」、㉒「みんなですつくる授業」と、学生同士の繋がりがや一体感を感じる学生も見られる。

㉑ みんなのレポートからも、みんなと繋がれるのは良いな!と思います。

㉒ みんなが話し合ったり一緒に動いたりしたわけじゃないのに、そういうことよりずっとみんなを近くに感じた気がしました。

㉓ 授業通信を見て考える時間が毎回必ずあって、これは「みんなですつくる授業」なんだと思いました。みんなの意見から考えたり学べるのがたくさんあって、とても濃い90分を毎回過ごしていました。

#### c) 匿名性の効果<sup>6)</sup>

学生の本音を引き出し、学生同士のつながり・一体感の形成を可能にする背景に、授業通信の「匿名性」があると考えられる。㉔㉕のように、「名前を出さないからこそ書ける」という学生は少ない。

㉔ 名前を出さないからこそ言える気持ちやこともあるのかなと思います。

㉕ 名前を出していなかったので、「なかなか言えない...でも名前も出ないし、ちょっと書いてみようかな」という気持ちになり、その日の授業の中で考えたことなどを書くことができて、自分の気持ちも少し楽になっていました。

「誰にも言えないこと」「友達には言えないこと」がレポートになら書ける。さらに、匿名ならば約100人の目に触れる授業通信に掲載されても問題ないわけである。実際、その日のレポートを授業通信に掲載されたくないという意思をあらわす「×」印がレポートに書かれることは、1年間を通してあまり見られない。むしろ㉖のように「うれしい」といった肯定的感情を抱く学生は少なくない。

㉖ 自分の書いた文章が載ると、不思議とうれしい気持ちになります。友達と「今日載ったんだ」と言い合ったりすることもあり、ちょっとした楽しみでもあります。

「誰にも言えないこと」「友達には言えないこと」がレポートになら書けるということは、授業中に学生が発言したり、学生同士で議論する場合に出てくるのが難しいレベルの本音が、授業通信にあらわれていることを示唆している。なぜならまさに、「誰にも言えないこと」「友達には言えないこと」という性質をもつからである。もちろんこれは授業の内容や目的次第であり、授業中の発言・議論と授業通信の優劣を指摘するものではない。

#### (7) 他者理解・自己理解

普段話さない本音や内面が授業通信に見られるということは、授業通信には「他者理解」を深める効果もあることを意味している。また、㉗㉘のように他者の表現に出会うことで、自分に気付かされる、すなわち「自己理解」も深まっていく。

㉗ 自分の考え・思いと似たような人がいて、それをうまく自分が書けなかった時、その人が書いてくれているととても共感するし、それが言いたかった!とうれしくなります。

㉘ 「私もそう思う」と自分の気持ちに気付かされることもありました。

このように授業通信を通して他者を知り、その他者理解を契機として自己理解が深まるという一連の流れがある。大学生は生涯の中でも、自分づくり、アイデンティティ形成が重要なテーマとなる時期を生きている (Erikson, 1959, 1968)。このアイデンティティは、他者との関わりを通して形成されるものであるが (杉村, 1998)、授業通信をきっかけとした他者との相互作用・対話は、学生のアイデンティティ形成に寄与しているとも考えられる。

#### (8) 自己受容<sup>7)</sup> にもなる自己変容・他者受容

##### a) 自己受容の促進

他者理解・自己理解が深まることで、学生にはさらなる変化が見られる。とりわけ、授業通信に関する学生の記述で非常に多いのが、㉙㉚のように「自分だけが悩んでいると思っていたことが、実は同じように悩んでいる人もいたことで安心し

た」という類のものである。

- ㉞ 今までは自分だけがそう思っていると1人寂しい思いをしていましたが、みんなの心からの意見を読んで、みんなも同じように考えて悩んでいると知り少し心が軽くなりました。
- ㉟ みんなのレポートを見て、いろんな考え方を発見したり、同じだ!!と納得したり、似たような悩みを持っている人を見つけたら、この人も悩んでいるんだと思って、安心して、私も頑張ろうと思えました。

思春期・青年期を生きる大学生にとって、同じ年頃の多くの人が抱えやすい悩みや葛藤であっても、そうした会話をしないため、「自分だけがおかしい」と思い込みやすい傾向がある (e.g. 水島, 2012)。そうした中、授業通信で自分と同じような他者の体験・考えにふれることで、「自分だけが抱えているのではない」と気づく体験をする。すなわち、ここでも前述した「他者理解を契機とした自己理解」が見られるのである。さらに、自分だけがおかしいわけではないと安心することが、自分を受け容れること、すなわち「自己受容」にもつながっていく。

#### b) 自己受容にともなう自己変容

この自己受容で特筆すべきは、ありのままの自分を受け容れることが、自己の変化、すなわち「自己変容」につながっていく点にある。たとえば「カウンセリングの神様」とも称されるRogers (1961) は、「あるがままの自分を受け容れたとき初めて自分自身が変化するという逆説が存在する」と述べている。つまり人間は、現在の自分を否定して変えようとするから変わることができると思いがちだが、ありのままの自分を受け容れることによってこそ肯定的な感情が生まれ、変化するというのである。ここでのポイントは、上田 (2002) が指摘するように、人間は他者より優れていたり社会的に望ましいとされる特性が自分にあることで肯定的な感情が生まれるというのではなく、単にありのままの自分を受け容れることで肯定的な感情が生まれるという点にある。

これを授業内での学生の心理プロセスに当てはめると、およそ次のようになる。学生は、自分の過去や現在の葛藤・悩みについて、「自分だけがおかしい」などと思いつつ、他者とも話をできずにいた。そして、そんな自分を受け容れられず、

自分を変えようと試みたものの簡単には変わることができなかった。たとえば㉟のように、自分がマイナス思考であることを悩み、変わろうとして変わらない学生は少なくない。

- ㉟ 私は昔からとてもマイナス思考で、あまり周りの人が気にしない事まで気にし、悩んでしまいます。そんな自分が本当に嫌で、プラス思考になりたいと強く思っていました。

それが授業通信を通して、「自分だけではない」と安心して自分のあり様を受け容れることで、結果的に前向きになったり自信がつくなどの変容を見せていく。たとえば、この㉟の学生は以下のように続けている。

- ㉟ しかし、心理の授業を受け、マイナス思考でもいいんだという事を知り、ありのままの自分を受け入れていくようになりました。そして、マイナス思考になってしまった後にプラスに考えようとするようになりました。

つまり、「マイナス思考でもいいんだ」と自分を受け容れた結果 (自己受容)、自分のマイナス思考をいったん受け止めた上でプラスに考えるようになるという変化があった (自己変容) というのである。

しかしながら、自己受容や自己変容に際してプラスの感情だけが経験されるわけではない。むしろ㉟に見られるように、自分と向き合う際には普段見ないようにしている自分、気付かなかった自分に直面して苦しくなるということが起こる。

- ㉟ 友だちと心理の授業のことを話すと必ず誰かは「心が痛くなる」「自分に言われている気がして心にささる」などと言います。ダメージを受けている人がたくさんいますが、それほど深い内容ばかりだったんだなと思いました。

しかし、㉟㉟のように、こうした自分と向き合うプロセスを通してこそ、自己受容・自己変容が起こりうるのである。

- ㉟ 心理の授業は、時に過去のあまり思い出したくないこと、自分が目をそらしていたことをつきつけられ、辛い時もありましたが、この授業の90分間、自分と向き合うことで、新たな自分を発見することができました。
- ㉟ 授業を通して自分を知っていく中で、苦しいと思うこともあったけど、それ以上に私



持ちが軽くなって自信がついたので良かったです。

#### c) 自己受容にともなう他者受容

さらに、この自己受容を契機として、他者を受け容れること、すなわち「他者受容」も生起する。このことは、たとえば④「人を受け入れるということが、自分を受け入れることによってできるようになった」に見られる。

④ 授業通信を通して、「同じ思い、考えの人がいる」と知ることができて、とても気分が楽になりました。「私だけが悩んで、つらい思いをして頑張った。うらやましいな、みんなは辛い思いをしてなくて」と思った時もありましたが、授業を受けた後に、私だけじゃないと知ってから人に悩みが言いやすくなりました。他人の悩みなども聞けるようになりました。人を受け入れるということが、自分を受け入れることによってできるようになったと思います。

自己受容が他者受容につながることは、Rogers (1961) がカウンセリングの過程で、クライアント（相談者）が自己受容的になり、それにともない他者に対しても受容的になることを見出してから注目されるようになった現象である（上田, 2002）。このことから、授業通信にはカウンセリングと類似の効果があることが示唆された。

また、この自己受容と他者受容は、大学生においてはアイデンティティ形成、すなわち自分をつくったり他者との関係性を築いたりする上でも重要な役割を果たす（上村, 2007）。とりわけ保育者養成校の学生にとっては、現在の問題だけでなく、将来学生が保育者となった際、子どもや保護者といった他者に対する受容・共感にもつながっていく点でも重要なのである。

#### (9) まとめ：授業通信の効果

以上（1）～（8）の授業通信の効果を整理すると、「レポートの質の向上」「教員－学生間の信頼感形成」「授業内容の定着・深化」「復習の充実化」「授業外の能動的学習」「他者との相互作用・対話の促進」「他者理解・自己理解」「自己受容にともなう自己変容・他者受容」といった8つの効果が見られた。

これらの効果の中で、「教員－学生間の信頼感形成」「授業内容の定着・深化」「他者との相互作用

用・対話の促進」については、「何でも帳」（田中, 1997）、「授業通信」（藤田・溝上, 2001；溝上・藤田, 2001）などの先行研究と類似性を見せた。とりわけ「他者との相互作用・対話の促進」で見られたように、授業通信によって学生同士の相互作用、教員と学生の相互作用を活性化させ、学生の能動的学習につなげている点は、アクティブ・ラーニングの観点からも評価できよう。

## 5. 授業通信の現状の課題と今後の展望

### (1) 授業90分の時間配分

実際の授業では、授業通信を参照しながら授業を展開するため、一通り目を通し、その一部を掘り下げると20分は要する。さらに授業終わりのレポートの記述に15分は必要となる。つまり、授業通信に関わって毎回30分以上が必要になるのが現状である。また、授業には映像や音楽など様々な視聴覚教材を取り入れるため、実際の理論的な説明をする時間は限られ、かなりタイトな90分になる。その結果、時間的にも心理的にも「余裕」がない中で授業することが多かった。学生にその場で意見を求めたい時も、学生の反応を「待つ」ことが十分にできていないことも少なくなかった。

この問題は、90分の時間配分に毎回苦慮する結果、授業の流れや説明を吟味することにつながり、結果的には良い意味での緊張感が生まれ、1コマ90分のまとまりも出てきて改善されつつある。いずれにしても、「余裕」も授業のうちという意識をもち、偶発的かつ創造的な学生の反応を引き出す余裕を常に授業に組み込めるようにしたい。

### (2) 実際の相互作用の少なさ

授業通信に頼るあまり、授業内での実際の学生の発言や学生同士の議論が少なく、表面上は教員から学生への一方向的な授業になりがちである。この点は（1）の授業時間の問題もあり、学生の反応を「待つ」ことが十分にできていない感がある。そこで、たとえば隣同士で意見を出し合う時間を数十秒確保するなど、授業内容に応じて授業内での発言や議論を活性化する手立てを講じていきたい。

また、「教育心理」「保育の心理学Ⅰ」は50人規模の講義型授業であり、教員と学生の個別の関わりには限界がある。それゆえ筆者は、たとえば大学広報用の写真撮影をきっかけに学生と関わるな

ど、授業外での学生との関わりで補うようにしている(上村, 2014a)。これについては、今後もさらなる関わりを模索していきたいと考えている。

### (3) 活用方法のバリエーション

実際の授業内における授業通信の活用方法は、重要箇所アンダーラインをひく、穴埋めをするといった単調なものになりがちである。そのため、授業通信を読むだけの時間が長くなるように、授業90分の中に分散して組み込むように配慮はしている。

しかしながら、様々な内容を欲張るあまり、④⑥のように学生に長く感じさせたり消化不良を起こさせていることがある。

④⑥ 授業通信については、毎回いろんな意見や考え方を学ぶことができるので良いなと思います。ですが、その1つの項目が長すぎたり、大事なポイントがありすぎて、頭の中がぐちゃぐちゃになってしまうので、そこが難しいです。

今後は、授業通信の内容を精選することにくわえ、読んだ感想や意見をその場で求めていく、問題やクイズを隣同士で話し合うなどの活用方法のバリエーションを模索していきたい。

### (4) レポートの書き方の指導

筆者は、授業レポートの書き方の指導において、「質よりも量」を目指して「真剣に」書くことを重視している。これは量質転化の法則、すなわち量をこなすことで質がともなってくるという考えにもとづいている。また、文章の「上手」「下手」ではなく、自分なりの思いや考えといった「内面がどれくらい真剣に表現されているか」を重視しているため、学生が文章の巧拙をあまり意識することなく、自分の思いを表現できるように促しているという側面もある。これにより④⑦のように、苦手意識のあった文章が書けるようになったという学生も少なくない。

④⑦ 私は自分の事を他人に話したり長文を書くこともとても苦手だったのですが、この授業のおかげで、自分の話を人にするのが苦手ではなくなったし、長文も書けるようになりました。

実際、授業通信の効果もあって、ほとんどの学生が授業終わりの15分でB 6用紙いっぱい真剣

な思いを書いており、だからこそ授業通信の充実につながっている。しかしながら、系統的なレポートの書き方の指導は不十分で、レポートの記述が授業内容から離れて自分の経験に終始したり、考察が浅いレベルでとどまってしまうといった問題が残されている。

また、心理学以外の授業への波及効果も今後の課題である。たとえば保育園や幼稚園での実習日誌では、考察が浅く感想にとどまっているという保育現場からの指摘は多い。筆者の実感としても、心理学の授業ではよく書けていた学生が、他のレポートや論文などになると書けなくなるということは珍しくない。筆者は現在、幼稚園での教育実習、および保育・教職(幼稚園)実践演習をメインで担当していることもあり、短期大学2年間を通じたレポート・文章についての指導の手立てを検討する必要性を感じている。

### (5) 授業の本質的な部分の教材研究

授業通信はあくまでツールであり、授業の本質的な部分の教材研究も欠かすことができない。そのためにも上村(2014b)で論じたように、筆者自身が保育現場で子どもと関わる経験をさらに積んだり、保育者の子どもに対する援助を学んだりする必要があると考えている。これによって保育者を目指す学生に、保育現場に密接した授業展開が可能になると考えている。

## 6. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、学生のレポートの記述を分析対象としており、定量的な検討は行っていない。くわえて、分析対象となったレポートは授業での評価対象となるため、学生にとっては授業通信のマイナス面を記述しにくかったり、プラス面を誇張したりと実態と遊離している可能性がある。また、本研究で示された効果は、それぞれの学生によって個人差がある。それゆえ今後は、藤田・溝上(2001)のように授業通信の効果を測定する尺度を構成し、定量的な分析をする必要があるであろう。

また、本研究の授業通信に特徴的な効果として「自己受容」「自己変容」「他者受容」などカウンセリングに類似した効果が示唆されたものの、そのメカニズム、および日常やその後への効果について詳細に検討しきれなかった。筆者は、本研究でも見られたように「自己受容」が「自己変容」「他

者受容」を促すこともあって、学生の自己受容を意識的に働きかけている側面がある。たとえば④のように、1年間の最後に「1年間の授業をふり返って」のレポートで、授業通信への教員のコメントによって「こんな自分でもいいんだ」と思うことができ、とてもうれしくてすっきりした」と、自己受容とそれとともなう自己変容を示唆する学生もいる。

④ (1年の) 最初の頃にレポートに、「私は悩みが多くてこんなにマイナスに考えたくないけど、マイナスのことを考えないということは自分から逃げているような気がして、こんなくり返しの自分の性格が嫌だ」と書いた時に、授業通信で、自分に真剣に向き合っている証で、悪いことではないと言って下さったのを聞いて、その時に初めて「こんな自分でもいいんだ」と思うことができ、とてもうれしくてすっきりしたのを今でも覚えています。

こうした教員のコメントは、他の学生にも波及効果がある。たとえば先の⑩の後半部分で、

⑩ レポートに対して先生が言う一言も、私にとっては気持ちが軽くなったりポジティブになれるきっかけでした。

とあるように、授業通信への教員のコメントも重要な意味をもつと考えられる。ここでの学生へのコメント・働きかけの原則は、上村(2009)で論じたように、その背景にある発達観・人間観も重要になると考えている。実際、④のように筆者のコメントの原則を感じ取っている学生もいる。

④ 授業通信でネガティブなことを書いていたら必ず先生は「逆に良いと思う」といいところを見つけ出して認めてくれるので、気持ちが楽になります。うれしいです。

そこで今後は、教員のどのような働きかけが学生の自己受容とそれとともなう自己変容・他者受容を促すのかを検討したい。その際、受講学生や卒業生にインタビューをすることで、より詳細な効果が検討できよう。

付言すると、授業通信の効果はカウンセリングにくわえ、エンカウンター・グループ、集団療法など集団の力を利用した活動・治療の効果とも類似性があると思われる。それゆえ、授業内で生起しているグループ・ダイナミックス(集団力学)についても機会を改めて検討したい。

## おわりに

授業通信の取り組みを始めたのは、筆者が現在の勤務校に着任して4年目のことである。授業通信の作成にはそれなりの労力がかかることが予想される上、効果がどの程度あるか、1年を通して継続できるかなど様々な不安があった。

実際、授業通信を作成して授業展開するまでに、(a) 約100人分のレポートに目を通す、(b) 掲載候補をまとめる、(c) 授業の流れに沿って並び替える、(d) 全体のバランスを考えて削る、(e) 授業のパワーポイントに組み込むといった流れがある。掲載できるレベルのレポートが少なく困ることはなく、むしろ厳選するのに苦心することも重なり、準備にはかなりの時間を要する。それゆえ、授業通信をひとまず半期あるいは1年間続けてみて、効果があまりないようであれば潔くやめるつもりでいた。それが今、3年続いている。様々な課題はあるものの、一定の手ごたえがあったからこそ継続できたと感じている。

授業通信を導入した年は、先行きが見えない不安も大きかったが、それ以上に発見や感動も強かった。現在3年目で軌道に乗り始め、以前よりもねらい通りに、まとまりのある90分を展開できている感がある。しかし、「慣れ」の功罪で予想外の展開も少なくなっており、導入当初の熱を保つことの困難さを感じている。そんな折、⑤のレポートに出会い、初心を思い出させられた。

⑤ 授業通信は、いつも授業中に読むと、不安や悩んでいたことはみんな同じで一人じゃないんだとわかり、安心できるものです。普段友達とは話さないことをこの授業では考えて、勇気を出して自分の内面について書いているので大変だと思うことはありますが、いろいろな人の意見や内面を知ることができるので、とても熱心に読ませてもらっています。

学生にとって「普段友達と話さないこと」だからこそ、自分の内面をレポートに書くのは「勇気のいること」だということ。毎年授業をしている筆者にとってはまさに毎年のことかもしれない。しかしながら、当の学生にとっては初めてで新鮮なことであり、しかしそれゆえに不安を喚起するものでもある。そうした不安があるにもかかわらず「勇気を出して」自分の内面を書いているのである。このことを忘れてしまうと、授業通信が形

骸化し、教員と学生との相互作用も形だけのものになってしまう。これではアクティブ・ラーニングからは程遠いものとなるであろう。それゆえ、去年までと同じような学生の反応であっても、全く同じ年、同じ反応はないこと、そして何より学生にとっては初めての体験であることを忘れずに取り組んでいきたい。

## 注

- 1) 「保育の心理学」は、保育との関連で子どもの発達・学びの過程について学ぶため、「発達心理学」と「教育心理学」を統合して2011年度より新設された科目。講義型授業「保育の心理学Ⅰ」と演習型授業「保育の心理学Ⅱ」がある。
- 2) 「発達心理学」とは、人間の生涯にわたる発達の過程・メカニズムを解明する学問領域。かつては「児童心理学」と呼ばれ、主に子どもの発達を対象としていた。しかし、人間の発達は受精から死までが問題になるため、生涯を射程に入れた「発達心理学」と呼ばれるようになった。この点については、無藤・やまだ (1995)、高橋・波多野 (1990) などが詳しい。
- 3) 授業に対する意見や感想を書く用紙は、コメントカード、リアクションペーパー、感想用紙など様々な名称で呼ばれている。筆者が「レポート」と呼んでいる理由は主に2つある。1つには、レポートが評価対象となって成績に反映されることを学生に意識づけ、丁寧な記述を促すためである。もう1つは、単なる感想、つまり「おもしろかった」「よくわからなかった」に留まるのではなく、「どのように」感じたのか、「なぜ」そう感じたのかなど、具体的かつ深い考察を求めるためである。
- 4) 実際の授業では、音楽の歌詞、映画やテレビ番組などを利用して授業内容を説明することが多く、それを受けて、学生からの推薦が出てくることがある。
- 5) 学生の本音を引き出すことは、筆者の授業において重要なことになる。一方で、悩みや葛藤に関わる本音を引き出し過ぎて、学生自身が向き合いきれなくなる危険性もあるため

(cf. 河合, 1970)、コントロールの加減には常に留意する必要がある。

- 6) 筆者の授業通信では匿名性に意味があるが、ここで「常に匿名にした方が良い」ということを論じたいわけではない。たとえば豊田 (2007) のように、本名を出して学生のコメントを紹介する授業もある。匿名にするかどうかは、授業目的や内容などから使い分けられる類のものであろう。
- 7) 「自己受容」は、「自己肯定感」や「自尊感情」など自分に対する肯定的な感情・態度を表す概念と混同されやすいが、文字通り「自分を受け容れる」という点に独自性がある。つまり、自分の肯定的な側面だけでなく否定的な側面も含めて「ありのままの自分を受け容れること」を意味する概念である。

## 引用文献

- 土井隆義 (2014). つながりを煽られる子どもたち ―ネット依存といじめ問題を考える― 岩波書店
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.  
(エリクソン, E. H. 西平 直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton & Company.  
(エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1973). *アイデンティティ ―青年と危機―* 金沢文庫)
- 藤井利江・山口裕幸 (2003). 大学生の授業中の質問行動に関する研究 ―学生はなぜ授業中に質問しないのか?― 九州大学心理学研究, 4, 135-148.
- 藤田哲也・溝上慎一 (2001). 授業通信による学生との相互行為Ⅰ ―学生はいかに「藤のたより」を受け止めているか― 京都大学高等教育研究, 7, 71-87.
- 河合隼雄 (1970). *カウンセリングの実際問題* 誠信書房
- 向後千春 (2006). 大福帳は授業の何を変えたか 日本教育工学会研究報告集, 5, 23-30.



- 溝上慎一 (2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂
- 溝上慎一・藤田哲也 (2001). 授業通信による学生との相互行為Ⅱ -相互行為はいかにして作られたか- 京都大学高等教育研究, 7, 71-87.
- 水島広子 (2012). 思春期の意味に向き合う -成長を支える治療や支援のために- 岩崎学術出版社
- 無藤 隆・やまだようこ (1995). 生涯発達心理学とは何か -理論と方法- 講座生涯発達心理学 (1) 金子書房
- 織田揮準 (1991). 大福帳による授業改善の試み -大福帳効果の分析- 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学), 42, 165-74.
- 小野田亮介・篠ヶ谷圭太 (2014). リアクションペーパーの記述の質を高める働きかけ -学生の記述に対する授業者応答の効果とその個人差の検討- 教育心理学研究, 62, 115-128.
- 大山泰宏 (1998). 授業のフレームと日常の知 -「何でも帳」を主とした相互行為分析を通して- 京都大学高等教育研究, 4, 65-81
- Pennebaker, J. W. (1997). *Opening up: The healing power of expressing emotions*. New York: Morrow.
- (ペネバーカー, J. W. 余語真夫 (監訳) (2000). オープニングアップ -秘密の告白と心身の健康- 北大路書房)
- Rogers, C. R. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.
- (ロジャーズ, C. R. 諸富祥彦・末武康弘・保坂亨 (訳) (2005). ロジャーズが語る自己実現の道 岩崎学術出版社)
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成 -関係性の観点からのとらえ直し- 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 (1990). 生涯発達の心理学 岩波新書
- 田中毎実 (1997). 公開授業のめざしたもの 京都大学高等教育教授システム開発センター (編) 開かれた大学授業をめざして -京都大学公開実験授業の一年間- (pp. 14-21) 玉川大学出版部
- 豊田一秀 (2007). 大学生を「保育」する 幼児の教育, 106, 26-32.
- 宇田 光 (2005). 大学講義の改革 -BRD方式の提案- 北大路書房
- 上田琢哉 (2002). 自己受容と上手なあきらめ 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 (pp. 189-205) ナカニシヤ出版
- 上村有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連 -個人志向性・社会志向性を指標として- 発達心理学研究, 18, 132-138.
- 上村有平 (2009). 生涯発達の観点からみた現代教育へのエリクソン理論の示唆 心理学, 30 (1), 20-30.
- 上村有平 (2014a). 保育者養成校における広報活動が教育活動へ及ぼす効果 -写真撮影を通じた学生との関わり- 全国保育士養成協議会第53回研究大会研究発表論文集, 228.
- 上村有平 (2014b). 保育者養成校の初任者教員が幼稚園・保育所で研修を行う意義 山口芸術短期大学研究紀要, 46, 9-14.

#### 付記

本論文は日本保育学会第68回大会(2015年5月)、山口学芸大学・山口芸術短期大学FDSD研修会(2016年2月)、全国保育士養成協議会第55回研究大会(2016年8月)での発表をもとに加筆・修正したものです。研究に御協力いただいた学生の皆さんに深く感謝いたします。

なお、本研究は2015年度および2016年度山口芸術短期大学若手研究助成を受けて行われました。

## 教育心理 授業通信 vol. 10

2015.6.29/30

### ◆いわゆる「女子」の特徴

- ①私が「女子ってこんなんだな」と思うものとぴったりでした。中学生の頃、仲間外れにしている子の悪口をその子に聞こえるように言っている子がいました。また、一緒にいる子をウザがったり悪口を言ったりして、次の日には何事もなかったようにふるまう子もいたりしました。
- ②「他人から傷つけられてきた人」というフレーズを知り、主張が強くて私が苦手だと思っていた人も悩みを抱えていて辛かったのかな…と思うと、その人のことを知ろうともせず、苦手・嫌いと思っていた自分が嫌だし、その人に申し訳なかったなと思いました。
- ③今まで傷ついてこなかった人なんていないと思うので、多かれ少なかれ当てはまるのはもっともだなと思いました。みんなのレポートを読んで、みんなも「女子」してきたんだなと思いました。「自分だけが特別感じてきたものではない」とわかるだけでも、心が軽くなると思いました。

### ◆青年期におけるアイデンティティ形成

- ①中学生くらいの時、「私ここにいていいのかな」とか「この世界にいる理由って何」と思うことがしばしばありました。
- ②「自分はなぜ生きているのだろう」と考えることがたくさんあって、自分が死んでも誰も悲しまないんじゃないかとか色々考えてぐちゃぐちゃになります。けれど、「悩む」ことで自分がつくられていく、「悩む」ことで自分をつくっていくと勉強して、悩んでもいいんだと心が晴れた気がします。
- ③今でもたまに「私は友達誰か1人にでも大切に思われているのかな？」と不安になることがあります。いつまでたっても「誰かに大切に思われたい」という欲は消えません。これからも消えないと思います。けれど、相手にばかり求めてはだめだということも学んできました。
- ④人と関わるのがとても怖くなる時があります。バイトをしても、友達と話していても「この人に傷つけられるんじゃないか、酷いことを言われるんじゃないか」と考えて臆病になることがあります。だけど人と関わらないと分からない自分だってまだまだ居ると思うので、宝探しだと思って嫌われても前を向いて、きっと誰かが信頼してくれると信じて頑張ろうと思います。

### ◆エリクソン理論の特徴：アイデンティティを考える際の注意点

- ①本当に今、私は保育士としてやっていけるのか悩んでいて、「病み期」に入りそうな心境です。
- ②短大は私が思っていた以上にハードでした。5月の頃は本当にやめようか迷っていました。
- ③中高生の時は芸短に入ることで必死でした。しかし、いざ学生になってみると専門的なことを学びぼんやりとしていた保育士という職業がはっきりしてきて日々不安になっていく一方です。今まで簡単に考えていた自分に腹が立ちます。
- ④今、私は本当に将来について悩んでいて、「もう保育士になれるわけない」と毎日へこんでいます。ですが、この悩みは期待（希望）があるからこそあるものだと思い、「保育に向いていない」と思っている裏で希望をもっていることに気づかされました。
- ⑤みんなも同じように悩んできて、悩むことが普通のことなんだと思いました。保育士や幼稚園の先生に向いているのかと悩むということは、本当になりたいと思っている自分がいるからこそ悩むんだと思いました。
- ⑥一の部分があってこそその十の部分がいけるといところが、人のいいところだと思いました。一の部分がないと、十のことがあった時の嬉しさや喜びも感じるできないし、悔しいとか辛いとかいう感情すら持つことができないと思うから、生きていてもおもしろくなさそうだなって思います。一の部分と十の部分ひとつ残らず今まで感じてきたことが今の自分を作っているんだと思ったら、辛いことも楽しいことも経験することが幸せだなと思いました。
- ⑦いつもこの授業では何かが心にささってきて変な気持ちになります（悪い意味ではないです）。自分今何やってるんだろう、何のために学校きてるんだろうって、顔は笑ってても心は笑ってないようなそんな気分になることが多いです。いつも笑顔でいたいって思えば思うほど心は病んでしまったりと、最近は気持ちが忙しいです。

◆人間は「仮面」をかぶって生きている

- ①「女子」の特徴の「裏表がある」。私ではないか…と感じてしまいました。今までずっと、裏表のない素直な人間になりたいなあと思っていました。どうしたら素直な心になれるのだろうか…裏の自分が出てしまった時にふと思います。
- ②私は人見知りなどをしてしまい、人によって接し方が変わってしまうので、裏表があるように感じます。
- ③どうしても幼なじみに会ったり電話したりすると居心地が良くて、大学にいるとついそれと比べてしまって、無理をしている自分に疲れてしまい、それがストレスに感じてしまいます。どうすればいいですか？
- ④人と違うと嫌われてしまいそうで怖くて、だから合わせて、自分を作って、キャラを設定して、無理して笑って、本当の自分はどこにいるんだろう、ただ人に存在を、ここに居ていいと、ここが居場所なんだと認めてほしいだけなのに、それすらも大きな願いなんだろうと思う自分がなんだか悲しいです。
- ⑤私は中学生の時、「周りに合わせるのが疲れる」とか「素って何なんだろう」とか悩んでいました。友達によって、自分のテンション、声のトーンが変わることは前から気付いていました。いつも、「どれが本当の自分なんだろう？」と思っていましたが、高校になって「どれも自分なんじゃないか？」と考え始めてからは本当に楽になりました。その時その時で笑って楽しんでいることに変わりはなく、どの友達も大切なことに変わりありません。

◆思春期を生きる難しさ

- ①私は中学の時の反抗期がすごくひどかったです。壁に穴が5つもあいています。今でもロゲンカによくって、ついひどいことを言ってしまう。家ではあまり話しません。秘密ばっかりかも(笑) 友達には何でも話せるのになあ～
- ②私は今、思春期&反抗期の全盛期で親のちょっとしたことが癪に障り、イライラしてめちゃくちゃ文句を言います。後で後悔しても遅いし謝りづらいますが、寝る前にLINEで「ごめん」「いいすぎた」など送ることもあります。
- ③中高生の時「自分って何だろう」「必要あるのかな」とか悩んで、またそんな風に「悩んでいる自分痛い」なんて思っていたけれど、それは全然変なことではなくて、自分にとって必要なことだったんだなと思いました。
- ④今でも少し、こういう悩みがあるのは自分だけなんじゃないか、みんなはいつも楽しそうでいいな～と思っていることがたまにあります。でも、そうではなくて、みんなそれぞれに何か悩みをもっているし、それが悪いことではないと分かりました。悩むことを苦にせず、たくさん悩んで大人になりたいです。
- ⑤「自分ってどんな人なんだろう」という疑問はずっと私の中であって、友達といると見つけられそうになったり、見失ったりして、未だによくわかりません。それでも、そんな悩みは持って当たり前で、今は焦らなくてもいいと分かり、気持ちが楽になりました。でも、そういう所でも「周りと一緒に」で安心するということを実感します。
- ⑥5月に初めての実習に行って、本当に保育士になれるのかなと思い、すごく悩んでいた時期がありました。自分だけではなく、他の人も思っているのかなと思うと少し安心しました。

◆おススメの曲 (みなさんより)

**ソナーポケット / 泣いてもいいんだ** サビは特に「自分、焦らなくてもいいんだ」と思えて安心できました  
**浜端ヨウヘイ / 無責任** 悩んだり落ち込んだりした時によく聞きます♪サビの「大丈夫さ」で安心できます  
**AAA / Charge & Go!** **関ジャニ∞ / Heavenly Psycho** **Kis-My-Ft2 / Smile**

◆おススメのドラマ (みなさんより)

**ライフ** いじめていたリーダーが最後にいじめられる側になる話  
**マザー・ゲーム** 大人＝ママの世界は恐ろしいなど毎回思っています  
**35歳の高校生** スクールカーストが分かりやすかったドラマです

## 保育の心理学 授業通信 vol. 9

2016.12.5

### ◆感覚運動期

- ①赤ちゃんが思うことは言葉にできないから、泣くことで自分の気持ちを表しているんだろうなと思います。
- ②赤ちゃんはよく見ているようで、実際は「見えているもの」しか見ていないということがよくわかりました。「見えないもの=存在しないもの」という発想が私にはなかったので、驚きの連続でした。

### ◆前操作期

- ①感覚運動期の自分は思い出すことはできないけど、前操作期からは自分にもあったなと思いました。
- ②年の離れた弟とお菓子を分ける時、広げておいたら少し少なくとも喜んで取ることを学んで得してやろうと考えていました。
- ③いちごを小さい頃いとこ同士で食べるとき、そのまま食べるより切った方が多く見えるという理由で、いつも切って分けていました。量は同じなのに、切って数が増えるだけで多く見えました。
- ④「舌切りすずめ」で、おばあさんが大きな箱を選んでおばけに襲われるというのがあるけれど、「大きくて立派なものだけが良いという訳ではない」ということを子どもに教えているのだと思いました。

### ◆形式的操作期

- ①小学生の頃、参観日で両親と似ていないと指摘される子や、両親が下の子の面倒ばかりで自分の相手をしてくれないと言う子などと、「ほんまにお母さんが私のこと産んだんかね〜？」という話題が出ました。
- ②父はB型、母はA型、兄もA型で、私だけO型で「なんで!？」とずっと思っていました。高校の授業でAとBの親からでもOは生まれると習い、安心した記憶があります。
- ③6歳までの間は感覚とかイメージとか身体で動いているような感じだけど、それを過ぎると論理的思考とか抽象的思考とかができるようになって頭を動かすようになるんだと思いました。
- ④物の見方、考え方ができることで、子どもにとっては知りたくなかった世界の汚い部分も知っていきます。知ることが悪いわけではなく、むしろ子どもの世界は広がって、大人の思考に近づいていくのだと思いました。
- ⑤19歳の私たちでさえ、悩んでも答えが出ない時だってたくさんあるのに、10歳頃の子も達ではなおさら答えなんか出ないと思いました。

### ◆まとめ：ピアジェの発達段階

- ①子どもの認知発達、ことばを持っていない赤ちゃんから、他者の視点に立てない幼児期、そしてだんだん論理的な思考が可能になり、抽象的な大人の思考へと少しずつ発達していくことがわかりました。
- ②今の私たちだと物が隠れていることが分かったり、数が同じことが分かるのは当たり前で、子どもになって考えてみるのがとても難しいことを感じました。

### ◆幼児特有の認知、10歳の壁

- ①埼玉の春日部市に行けばクレヨンしんちゃんに会える、戦隊ヒーローでも本当にいると思っていました。
- ②セーラームーンのショーを見に行ったら時、キャラクターの着ぐるみが大きかったので大泣きしました。私はただ想像を越える大きさに驚いただけだったけど、兄に「中に人が入っているんだ」と言われ、納得がいなくてケンカをしました。小4ぐらいでやっと兄の言葉の意味がわかりました。



- ③サンタさんを信じていたから、夜こっそりふとんの中で起きていて、サンタが来るのを待っていたり、「サインしてください」と書いた紙を机に置いていたりもしました。
- ④小2までは友達が言っても受け入れなかったのに、小4くらいになって友達に聞いた時はあっさり受け入れ、まだ小1だった弟にバラしていたように思います。
- ⑤Qお父さんと結婚すると言わなくなるのも、10歳の壁などに何か関わってくるのでしょうか？
- ⑥10歳は考えや体も大人になっていく中で、「早く大人になりたい」という気持ちと、世の中の暗い部分を理解し、「こんな大人になりたくない」という気持ちがせめぎあっている年頃なのかなと思いました。

#### ◆自己中心性～心の理論

- ①私が年長か小1の時に、父が祖母のことを「おふくろ」と呼んでいるのを聞いて「おばあちゃんよ」と注意したのを覚えています。父が「おふくろでいーの」と言ったのに対して、「おばあちゃんはおばあちゃんなの！」と怒って泣きました。
- ②手遊びを子どもたちの前で鏡動作になるように行うのは、自己中心性も関わっているんだなと思いました。
- ③大人になった今でも、自分のことになると周りが見えないこともあるし、大人になったから自己中心じゃないかといったら、そうじゃないこともたくさんあるなと思いました。
- ④自己中心性というので、他者の視点に立てないから、ケンカなどが起きた時の仲裁や「相手がこう思ったよね」と子どもに納得させるのが難しいだろうと思います。
- ⑤5歳くらいになると、他の友達心が分かるようになり、ゆずったり我慢ができるようになりますが、それは自己中心性が大きく関係していることが分かり、なるほどと思いました。

#### ◆心の理論

- ①白雪姫がお妃から受け取った毒りんごを食べようとした時、「どうして毒が入っているのに受け取るの！食べてしまうの！」と思いながらハラハラしながら見ていたことを思い出しました。
- ②「おかあさんといっしょ」の地方公演などで、子どもたちが「そっちいっちゃダメ」とか言っている場面を思い出しました。
- ③成長する中で、他者の視点に立って物事を考えられるようになり、相手のことを考えて行動できるようになったからこそ、「こうしたら相手にどう思われるんだろう」という所まで考えられるようになってしまったのかなと思います。そう考えると、認知が発達しない方が良いんじゃないかと思うけれど、みんなが純粹であると自分の知らない間に相手を傷つけてしまうことも多くなるのかなと思いました。

#### ◆まとめ：認知発達をめぐる獲得と喪失

- ①私は今でも、「何にでも命があって、感情があると思っている」と友だちに言うと、「何かの宗教？」「きもちわる！」と言われてショックでした。
- ②私は今もアニミズムがあり、ぬいぐるみに気持ちがあると思っています。
- ③できることが増えていく分、自由な発想や思い、夢は限定されていくんだと思いました。
- ④子どもと同じ目線で物事を考えられる保育者になりたいと思っていましたが、大人と子どもではそもそも見方が違うので、子どもと同じ目線で考えることがとても難しいことだと気付きました。でも、できるだけ同じ目線で考えたいと思う気持ちの方が大切なのかなと思いました。

